

カムチベット語捧八[Phongpa]方言の方言系統

鈴木博之

minibutasan [at] gmail.com

キーワード：チベット系諸言語 カム 香格里拉方言群 方言学 共通の改新

要旨

中国雲南省維西県で話されるカムチベット語捧八 (Phongpa) 方言は、わたり音位置に/r/が現れるという特徴をもつ。古期の音形式を反映すると考えられるチベット文語 (蔵文) 形式と比較すると、当該の/r/が文語つづりの r と明確な対応関係をもつことから、Phongpa 方言はある程度古い時代の音形を保つ方言と理解される。このため、現代語諸方言との関連において、古態の特徴がいかに位置づけられるかが問題となる。本稿では、蔵文の母音+末子音の形式に対応する Phongpa 方言の音形に注目し、文語つづりとの対応関係を明らかにし、周辺の諸方言と対照する。この作業を通じて、当該部分の方言間における共通の改新を明らかにする。この共通性から、Phongpa 方言は香格里拉 (Sems-kyi-nyila) 方言群維西塔城 (Melung) 下位方言群に属する方言であり、その中でも他の方言から最も早い時期に分化したものと推定する。

1. はじめに

中国雲南省迪慶藏族自治州維西県巴迪郷で話されるカムチベット語 Phongpa (捧八) 方言は、これまで雲南省のカムチベット語に関する研究が比較的多い中で、筆者が鈴木(2020)において初めて報告した。この方言は、表 1²に示すように、わたり音位置に/r/が現れるという特徴をもつ。それぞれの例にチベット文語 (蔵文) 形式を添える³。

表 1. わたり音位置に/r/をもつ Phongpa 方言の語形式

Phongpa 方言	語義	蔵文形式
ʔ ^h raʔ	血	khrag
ʔ ^h kraʔ	怖い	skrag
ʔ ^m p ^h roʔ	奪う	ʔphrog
ʔprə	書く	bri

¹ たとえば、陸紹尊(1990)、Hongladarom (1996)、Wang (1996)、Bartee (2007)、鈴木(2018)、Suzuki (2018)など。

² Phongpa 方言の音体系は次の通りである。子音：/p^h, p, b, t^h, t, d, t^ʰ, t̚, d̚, k^h, k, g, ʔ, ts^h, ts, dz, tʂ^h, tʂ, dʂ, te^h, te, dz, s^h, s, z, ʂ^h, ʂ, z̥, e^h, e, z, x^h, x, y, h, fi, m, m̥, n, n̥, ŋ, ŋ̥, ŋ̃, l, l̥, r, r̥, w, j, wj/；母音：/i, e, ε, a, a, o, u, u, u, e, ə/；超分節音素：語声調で4種（^ˉ 高平、^ˊ 上昇、^ˋ 下降、^ˆ 昇降）。分節音の表記の枠組みは Suzuki (2016)を参照。

³ 蔵文形式は de Nebesky-Wojkowitz (1956)の転写方式に基づく。

この特徴は、現代のチベット系諸言語においては少数派に属し、カムチベット語については鈴木(2007)の sProsnang (中路) 方言 (四川省甘孜州丹巴県) についての報告があるのみである (捧八と中路の位置関係は図 1 を参照)。わたり音位置に現れる /r/ を、古期の音形式を反映すると考えられる蔵文形式と比較すると、当該の /r/ が文語つづりの r と明確な対応関係をもつことから、Phongpa 方言はある程度古い時代の音形を保つ方言と理解される⁴。



図 1. Phongpa 方言と sProsnang 方言の分布地点

わたり音位置に /r/ が認められることは、チベット言語学において特段際立つものではない。古期のチベット語の音を反映しているとみなされる蔵文形式⁵に対応関係を認めることができ、それは同特徴が古期の音形式を単に留保しているだけであることを意味し、少なくともチベット系諸言語の歴史を考えるにあたって、その留保自体に特段の意義があるとは言えない。

⁴ わたり音位置の /r/ の存在は、カムチベット語について見れば、16 世紀や 18 世紀に漢字によってその発音が記録された文献の中に例証される。西田(1963)、鈴木(2009, 2015: 243-258)などを参照。また、トンパ文字で記録されたナシ語読書音 (経典言語読音) にも、チベット系の借用語の読みにわたり音位置の /r/ を発音した痕跡が残されている事例がある (和繼全 2012, 2015: 318)。

⁵ 蔵文形式に対して推定される音価について、本稿では格桑居冕、格桑央京(2004:379-390)の記述を基準とする。

ところが、共時的資料を基本とした方言学的アプローチをとる場合、この留保は極めて特異である。特に、東チベット文化圏において、チベット系諸言語について東部チベット文化圏で数百の地点の口語形式を調査 (Suzuki 2018, 2022, Endo et al. eds. 2021 などを参照) したうえで、2地点にのみ⁶体系的な留保が認められるという点は、目を引く方言特徴とみなしてよいだろう。しかも、図1に示すように、当該の2地点について地理的関連を認めることは困難である。留保という特徴はどの地域の変種にも見られてよいものであり、その歴史的発展を考えるためには、それぞれ近隣の方言と系統的にどのように関連するのかを明らかにする必要がある。

Phongpa 方言の所属については、雲南省全体とカムチベット語諸方言との関連について鈴木 (2020) と Suzuki (2020) が検討し、初頭子音の音対応や語彙の特徴を踏まえて Phongpa 方言の所属が香格里拉 (Sems-kyi-nyila) 方言群⁷であることを提示した。しかしながら、留保される /r/ 音という特徴が、下位方言区分を考えるうえで香格里拉方言群の祖形としても得榮徳欽方言 (sDerong-nJol) 方言群の祖形としても考えることができるため、下位区分を決定づける特徴であると考えることが困難なことも指摘した。

本稿の目的は、これまでの研究が初頭子音に焦点を当てていたため考察の対象外であった Phongpa 方言の母音+末子音形式を蔵文との対比をもとに記述し、それを周辺諸変種の事例と対比することで音変化についての共通の改新を明らかにすることにある。そして、それに基づいて、Phongpa 方言が香格里拉方言群維西塔城 (Melung) 下位方言群に属することを示す。

2. Phongpa 方言の所属問題

Phongpa 方言の方言所属が問題となる点について、表1の特徴を含む蔵文の音対応の位置づけが主要な論点となる。Suzuki (2020) は表1の特徴を蔵文 Kr, Pr 対応形式とし、さらに蔵文 Ky, Py 対応形式⁸を並列し、計4種の総合的な特徴に基づいて分類を行った。音対応を基準となる蔵文と口語形式の1対1で扱うのではなく、複数の音特徴をまとめて扱うことの重要性は、すでに西田(1987)や張濟川(2009)などでも指摘されている。

表2に Phongpa 方言とその周辺諸方言について、以上に述べた音対応関係を示す。表記は簡略化し、たとえば「/tc/系列」というのは「/tc^h, te, dz/およびこれらに先行子音が存在するもの (たとえば^htc^h, ^hte, ^hdz/など)」を含む。表2の配列は、地点が地理的に北から南の順になるようにし、Tsharethong (査里通) 方言、sNyingthong (尼通) 方言、Sakar (斯嘎) 方言、Lothong (洛通) 方言、Phongpa 方言、Zhollam (勺洛) 方言、Melung (永春) 方言となる。各方言の地理的な位置関係については、図2を参照。

⁶ 正確に記せば、中路の隣村で話される方言にも同様の特徴が認められることが分かっている。ただし、データは未公開であるため、ここでは便宜的に「2地点」と数える。

⁷ 方言群の分類と名称については、Suzuki (2018, 2022) を参照。チベット系諸言語の全体像から見たこれらの方言群の位置づけについては、Tournadre and Suzuki (2022) を参照。

⁸ ここでいう蔵文 Kr, Pr, Ky, Py 対応形式とは、次のようである。蔵文 Kr とは基字 k, kh, g に足字 r を伴う形式を含む全ての対応形式についていい、蔵文 Pr とは基字 p, ph, b に足字 r を伴う形式を含む全ての対応形式についていい、蔵文 Ky とは基字 k, kh, g に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式についていい、蔵文 Py とは基字 p, ph, b に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式についていい。

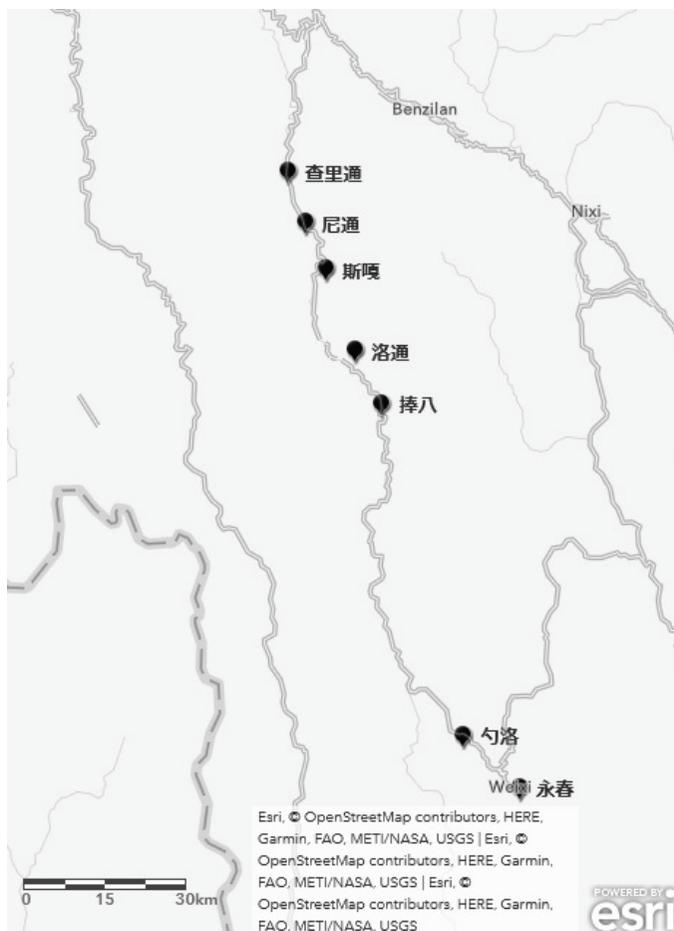


図 2. Phongpa 方言と周辺の諸方言の位置関係

表 2. Phongpa 方言とその周辺諸方言の藏文対応形式

方言名\藏文	Ky	Kr	Pr	Py
Tsharethong	/tɕ/系列	/t/系列	/t/系列	/ɕ/系列
sNyingthong	/tɕ/系列	/t/系列	/t/系列	/ɕ/系列
Sakar	/tɕ/系列	/t/系列	/t/系列	/ɕ/系列
Lothong	/tɕ/系列	/t/系列	/t/系列	/ɕ/系列
Phongpa	/tɕ/系列	/kr/系列	/pr/系列	/ɕ/系列
Zhollam	/tɕ/系列	/k+V ^s /系列	/p+V ^s /系列	/ɕ/系列
Melung	/tɕ/系列	/k/系列	/p/系列	/ɕ/系列

Suzuki (2020)は、Phongpa 方言より北に分布する諸方言のうち、Sakar 方言と Lothong 方言までは香格里拉方言群に、Tsharethong 方言は得榮徳欽方言群に属し、これらに挟まれる sNyingthong 方言は両者の中間的特徴をもつと結論づけている。しかしながら、藏文 Kr, Pr 対応

形式は Lothong 方言以北の諸方言に共通している。これらを「北の類型」と呼ぶことにする。また、Zhollam 方言と Melung 方言は香格里拉方言群維西塔城下位方言群に属するとされる (Suzuki & Tshering mTshomo 2009, 鈴木 2011, 2013a)。これらは蔵文 Kr, Pr 対応形式について他と異なる対応関係を示し、これらを「南の類型」と呼ぶことにする。

北の類型と南の類型の異同については、表 2 の蔵文 Kr, Pr 対応形式に関する音対応の類型に大きな異なりが認められ、異なる音変化史をたどったことは明らかである。この上で、同特徴について、Phongpa 方言が北、南どちらの類型に属するのか、それとも異なる来歴をもつのかを明示的に示す必要がある。本稿で取り組む課題はここにある。

表 2 で扱う特徴すなわち初頭子音部分の音対応は、チベット言語学における方言区分を考えるとときに参照する具体的な現象であり、研究の蓄積がある (西 1986、西田 1987、江荻 2002、張濟川 2009)。一方、音節を構成する残りの要素である母音+末子音部分⁹については、瞿靄堂 (1990) のような研究があるものの、方言区分を検討するときに考慮されることは少ない。また、超分節音の発展については、伝統的に方言区分の枠組みと関連づけられる重要な特徴とされる (瞿靄堂、金效静 1983、瞿靄堂 1996) が、下位方言区分を議論するときに参照可能な特徴にはならない。

このことから、Phongpa 方言について検討すべきは母音+末子音部分であると言える。実際のところ、香格里拉方言群内部で見ると、維西塔城下位方言群に特徴的な音対応が認められる。つまり、母音+末子音部分の音対応を明らかにすれば、下位方言区分についてさらに示唆的な結論に達することが予想される。

3. Phongpa 方言の母音+末子音形式の音対応

本節では、まず Phongpa 方言の母音+末子音の形式について記述し、次に同形式を周辺の諸方言と対照し、共通の改新がどのように認められるかを分析する。

3.1. Phongpa 方言の母音+末子音形式の記述

まず、表 3 に Phongpa 方言の母音+末子音形式の音対応の一覧表を掲げる。蔵文が表す母音には 5 種 (a, i, u, e, o) があり、末子音字は閉鎖音の後接字 (b, d, g)、鼻音の後接字 (m, n, ng)、それ以外の後接字 (r, l, s) に分けて考えることができる。後接字に再後接字 s がつく場合があるが、口語形式に明確な対応関係を得られないため、表 3 では再後接字 s の有無を区別しない。表 3 の記述は語末位置で現れる事例を中心とし、必要に応じて語中での形式についても触れる。なお、開音節については # で示し、また後接字 ' は開音節に準じて扱う¹⁰。

なお、/ で区切ってあるものは自由変異ではなく、語ごとに決まっている。すなわち、特定の

⁹ 漢語で「韻母」と呼ばれるものにおおむね対応するが、漢語の用語としての韻母は、本稿が言う「わたり音」も含む。このため、本稿では当該部分を指す名称として韻母を用いず、母音+末子音部分とする。

¹⁰ ここでいう「後接字」「再後接字」は蔵文の構造上の名称で、それぞれ「母音の直後に現れる子音字」「後接字の直後に現れる子音字」についていう。

語には1つの音形式が決まっており、口語形式と蔵文との対応関係を複数認める必要があるということである。また、空白は該当する音対応を記録した語彙の中に見出せなかったことを意味する。

表 3. Phongpa 方言の母音+末子音形式の音対応一覧

末子音字 蔵文母音字	# / ' b d g m n ng r l s
a	a uʔ iʔ aʔ ũ/ĩ ĕ/ĩ ɔ̃ ε: u: ε:
i	ə uʔ iʔ əu ũ ɔ̃/ũ/ũ i:
u	u uʔ ɔʔ ũ/ũ ĕ ɔ̃ u: u:
e	ə uʔ iʔ/eʔ aʔ ă ĩ e: u: ə:
o	u uʔ ɔʔ owʔ ɔ̃ ɔ̃ ɔ̃ u: ɔ̃: ɔ̃:

本稿では、以上の音対応について、語例の提示を割愛する。議論に必要な例について、適宜語形を示す。

3.2. 母音+末子音形式における Phongpa 方言の類型：地理的視点から

表3にまとめた音対応について、表2で示した諸方言を参照対象として、具体例を対照して掲げる。表4は末子音を伴わない場合、表5は閉鎖音の後接字を伴う場合、表6は鼻音の後接字を伴う場合、表7はそれ以外の後接字を伴う場合をまとめる。語形については、網羅的に提示するのではなく、各方言について収集した基本語彙の中に認められる該当する形式のみを掲げる¹¹。

表 4. Phongpa 方言とその周辺諸方言の母音（開音節）の音対応

蔵文形式	sa	mi	chu	me	so
語義	土	人	水	火	歯
Tsharethong	˦sʰa	ʼŋə	˦tɕʰu	˦ŋiʔ	˦sʰu
sNyingthong	˦sʰa	ʼmɔ̃	˦tɕʰu	˦ŋi	˦sʰu
Sakar	˦sʰa	ʼmə	˦tɕʰɤ	˦ŋi	˦sʰu
Lothong	˦sʰa	ʼnə	˦tɕʰu	˦ŋiʔ	˦sʰwo
Phongpa	˦sʰa	ʼmə	˦tɕʰu	˦ŋə	˦sʰu
Zhollam	˦sʰA	ʼmə	˦tɕʰu	˦ŋi:	˦sʰɤ
Melung	˦sʰa	ʼmɔ̃	˦tɕʰu	ʼmi:	˦sʰu

¹¹ 各変種における音表記は Tournadre and Suzuki (2022)のいう pandialectal phonetic description に基づき、統一的な音標文字による。具体的な表記方法については、朱曉農(2010)や Suzuki (2016)を参照。

表4を見ると、蔵文 u 対応形式についてのみ Phongpa 方言は南の類型と共通の改新をもつと言える。その他の形式については、北の類型、南の類型ともに有意な差を認めることは困難である。しかし、ただ1点でも共通の改新と言える特徴があることには留意する必要がある。

次に、閉鎖音の後接字を伴う場合について、表5に掲げる。

表5. Phongpa 方言とその周辺諸方言の母音+閉鎖音後接字の音対応

蔵文形式	khab	skad	bod	phag	(d)m(y)ig	'brug
語義	針	声	チベット人	ぶた	目	龍
Tsharethong	ʔkʰɔʔ	ʔhkeʔ	ʔpuʔ	ʔpʰaʔ	ʔh̥ɲi:	ʔdɔʔ
sNyingthong	ʔkʰɔʔ	ʔhkeʔ	ʔpeʔ	ʔpʰaʔ	ʔh̥ɲi:	ʔdɔʔ
Sakar	ʔkʰaw	ʔhkeʔ	ʔpje	ʔpʰaʔ	ʔh̥ɲi:	ʔdɔʔ
Lothong	ʔkʰɔʔ	ʔhkeʔ	ʔpeʔ	ʔpʰaʔ	ʔh̥ɲi:	ʔdzɔʔ
Phongpa	ʔkʰuʔ	ʔhkiʔ	ʔpi:	ʔpʰaʔ	ʔh̥ɲəu	ʔmbrɔʔ
Zhollam	ʔkʰeʔ	ʔtei:	ʔpi:	ʔpʰa:	ʔh̥ɲiʔ	ʔmbo:
Melung	ʔkʰəwʔ	ʔhteeʔ	ʔpuʔ	ʔpʰaʔ	ʔh̥ɲiʔ	ʔmɔʔ

表5を見ると、蔵文 ab, ad 対応形式について Phongpa 方言は南の類型と共通の改新をもつと言える。「針」の例では、母音の質が広いか狭いかで二分できるとすると、Phongpa 方言では南の類型に分類できる。「声」の例では、母音はいずれも狭いが、Zhollam 方言と Melung 方言では/k/の前部硬口蓋音化が起きていると言え、それを引き起こしたのは母音の性質が/i/であったことによると考えると、Phongpa 方言は南の類型を示し、その中で/k/を留保していると考えることができる。

その他の形式については、北の類型、南の類型ともに有意な差を認めることは困難である。「龍」の例は、Phongpa 方言の初頭子音に両唇音が現れ、南の類型に一致する¹²。

次に、鼻音の後接字を伴う場合について、表6に掲げる。表6を見ると、いずれの蔵文対応形式についても、Phongpa 方言をめぐって明確な類型上の差異が現れているとは言えない。蔵文 an 対応形式について、Phongpa 方言と Zhollam 方言の間には共通性があると言えるが、南の類型に属する諸方言では、音節末に/ŋ/が一部認められるなどの特徴をもつが、Phongpa 方言についてはあてはまらない。

¹² 詳細は鈴木(2020)を参照。

表 6. Phongpa 方言とその周辺諸方言の母音+鼻音後接字の音対応

蔵文形式	lam	gsum	sman	bdun	thang	shing	'thung
語義	道	3	薬	7	平原	薪	飲む
Tsharethong	'jä	^h sō	ṁē	^h dē	ṁā	^h ī	^h ō
sNyingthong	'jä	^h sō	ṁjē	^h dī	ṁā	^h ē	^h ō
Sakar	'lāw	^h sō	ṁjē	^h djē	ṁō	^h ēj	^h wō
Lothong	'lā	^h sō	ṁē:	^h dē:	ṁō	^h ī	^h ō
Phongpa	'lā	^h sō	ṁī	^h dē	ṁō	^h ō	^h ō
Zhollam	'lɔŋ	^h s'ɔŋ	ṁī	^h dē	ṁɔŋ	^h u	^h ɔŋ
Melung	'laŋ	ṁɔŋ	ṁē:	^h dō	ṁō	^h ɛŋ	^h ɔŋ

一方で、表6にある蔵文対応形式で、記載しなかった音対応もある。蔵文 am 対応形式で、Phongpa 方言の中には/ü/に対応するもの、たとえば^hkuü/「乾いた」(蔵文 skam)がある。同じ蔵文形式に複数の音形式が対応するのは表3でも認められることではあるが、チベット系諸言語の記述でよく見られる。ただし問題となるのは、語彙の性質、すなわち日常語彙か文化語彙かといった差異が認められ、文化語彙にはつづり字発音が現れることもあり、方言学的研究では注意が必要であると指摘される (Denwood 1999: 38-39) が、「道」と「乾いた」の間にはそういった語彙的な性質の差異を認めることはできない。すると、Phongpa 方言には、日常語彙においても複数の層が認められ、一部の語彙は他の方言音を採用(借用)している可能性がある。

次に、その他の後接字を伴う場合について、表7に掲げる。

表 7. Phongpa 方言とその周辺諸方言の母音+その他後接字の音対応

蔵文形式	mar	gser	dngul	ras
語義	バター	金	銀	布
Tsharethong	'mje:	^h se:	^h ŋu	'ri:
sNyingthong	'ma:	^h sa:	^h ŋu:	're:
Sakar	'ma:	^h sa:	^h ŋɣ:	're:
Lothong	'ma:	^h s ^h a:	^h ŋu	're:
Phongpa	'me:	^h se:	^h ŋu:	're:
Zhollam	'mjē	^h sej	^h ŋu:	'fiē ^s :
Melung	'me:	^h s ^h ε:	ṁu:	^h fiε:

表7を見ると、蔵文 ar, er, ul 対応形式について Phongpa 方言は南の類型と共通の改新をもつと言える。「バター」「金」の例では、母音の質が/a/であるかないかで二分でき、Phongpa 方言では南の類型に分類できる。「銀」の例では、母音の質が円唇か非円唇かで二分でき、Phongpa 方言では南の類型に分類できる。「布」についても、母音の質に差異が認められるが、北・南の類

型という形で分かれるのではなく、Lothong 方言までが南の類型と同様の形式となる。

以上、表4～7に示した形式から、Phongpa 方言は南の類型と有意な類似を示すものが複数認められることが分かる。つまり、南の類型を構成する香格里拉方言群維西塔城下位方言群との共通の改新を複数持つといえる。初頭子音、特に r を含む対応形式を考察した鈴木(2020)、Suzuki (2020)と総合して考えれば、Phongpa 方言は維西塔城下位方言群に認められる特徴がよく現れていると言え、よって同下位方言群に所属する蓋然性が高いという見通しを立てられる。

3.3. 母音+末子音形式から見る Phongpa 方言の系統：香格里拉方言群内での位置づけ

3.2節の議論によって、Phongpa 方言が南の類型との系統的な関連をもつ考える妥当性を見出した。これを踏まえ、本節では Phongpa 方言が香格里拉方言群の他の下位方言群との類似関係が認められるかを検証する。

このため、先の議論で有意な差異が認められる音対応を対照して表8に整理する。

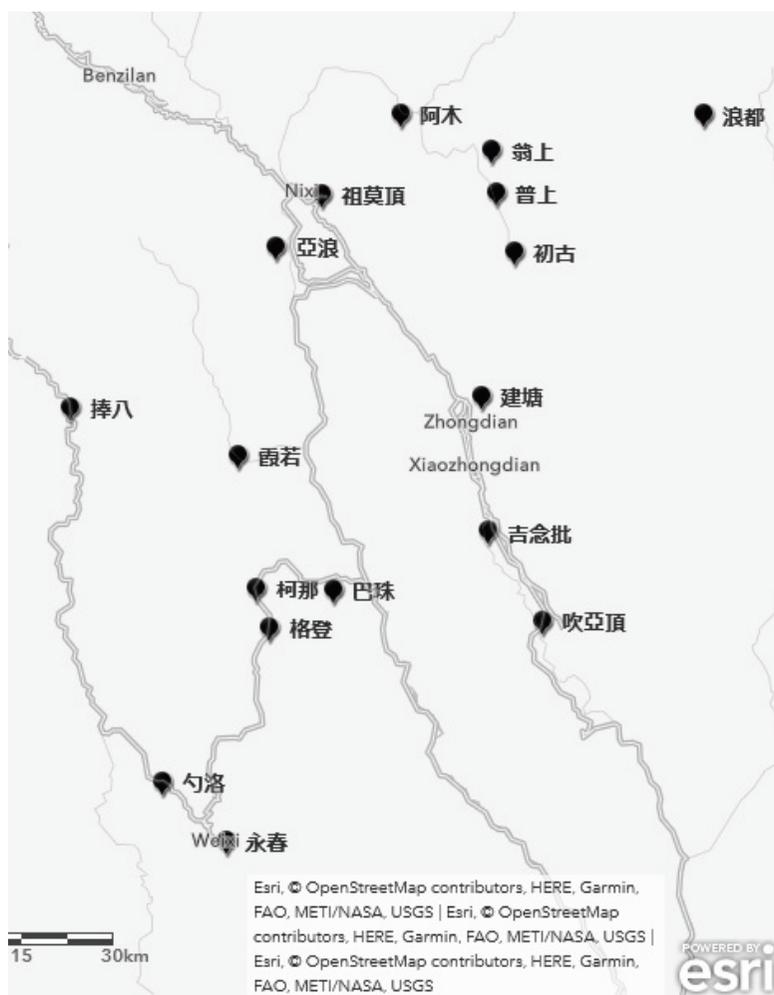


図3. 表8に提示する諸方言の位置関係

表8には、母音+末子音字の対応音の部分のみを掲げる。ただし、母音の直前に子音 r が来ないものに限定する。この母音の直前に子音 r が来ないという条件は、鈴木(2012, 2013b)などの維西塔城下位方言群の諸方言において、当該子音 r が母音形式に影響を与えるためである(表5、7も参照)。ただし Phongpa 方言では、r が初頭子音として維持されており、この条件はあてはまらない。表8において、初出となる sKobsteng (格登) 方言以下、すべて香格里拉方言群に属する。先述の Zhollam 方言、Melung 方言に加え、sKobsteng 方言と nKhorlo (各洛) 方言は維西塔城下位方言群に属する。mBacug (巴珠)、Byagzhol (霞若)、gYaglam (亞浪)、rTswamarteng (祖莫頂) の各方言は雲嶺山脈東部下位方言群に属する。rGyalthag (建塘)、Gyennyemphel (吉念批)、Choswateng (吹亞頂)、mTshongo (初古) の各方言は建塘下位方言群に属する。Phuri (普上)、dNgo (翁上)、Adma' (阿木) の各方言は翁上 (dNgo) 下位方言群に属する。Lamdo (浪都) 方言は独立の浪都下位方言群に属する。各方言の地理的な位置関係については、図3を参照。

表8. 香格里拉方言群における母音+末子音字の主要な音対応

藏文形式 ¹³	a	u	ab	ad	od	am	an	ang	ung	ar	er	ul	as
Phongpa	a	u	uʔ	iʔ	i:	ũ	ĩ	õ	õ	ɛ:	e:	u:	ɛ:
Zhollam	A	u	eʔ	i:	i:	ɔŋ	ĩ	ɔŋ	ɔŋ	ej	ej	u:	ɛ:
Melung	a	u	uʔ	eʔ	uʔ	uŋ	ĩ	oŋ	ɔŋ	ɛ:	ɛ:	u:	ɛ:
sKobsteng	e	u	uʔ	iʔ	oʔ	ũ	ẽ	õ	õ	ɛ:	ə:	u:	e:
nKhorlo	e	u	uʔ	eʔ	oʔ	ũ	ĩ	ɔŋ	ɔŋ	ɛ:	ɛ:	u:	ɛ:
mBacug	a	u	ɔʔ	ɛʔ	oʔ	ã	ẽ	õ	õ	ɛ:	ɛ:	u:	ɛ:
Byagzhol	a	u	ɔʔ	eʔ	iʔ	õ	ĩ	õ	õ	e:	ɛ:	u:	e:
gYaglam	a	u	ɔʔ	ɛʔ	i:	õ	ẽ	õ	õ	ər	ər	ĩ	ɛ:
rTswamarteng	a	u	uʔ	ɛʔ	uʔ	ã	ẽ	õ	õ	ɜ	ə	i:	ɛ:
rGyalthag	a	u	ɔʔ	ɛʔ	i:	õ	ẽ	õ	õ	o:	ɺ	u:	ɛ:
Gyennyemphel	a	u	ɔwʔ	eʔ	ejʔ	õ	ã	õ	õ	u:	ɺ	uj	e:
Choswateng	a	u	ɔʔ	eʔ	ejʔ	õ	jẽ	õ	õ	u:	ɺ	uj	e:
mTshongo	a	u	ɔʔ	eʔ	oʔ	õ	ẽ	õ	õ	o:	o:	e:	ɛ:
Phuri	a	u	ɔʔ	eʔ	iʔ	õ	ẽ	õ	õ	ɛ:	e:	e:	e:
dNgo	a	u	ɔʔ	ɛʔ	iʔ	ã	ẽ	õ	õ	aj	e:	uj	ɛ:
Adma'	a	u	ɔʔ	ɛʔ	uʔ	ã	ẽ	õ	õ	ɛ:	ɛ:	ũ	ɛ:
Lamdo	a	ɜ	əwʔ	eʔ	eʔ	ã	ẽ	õ	õ	je:	ɛ:	u:	e:

¹³ 表8の藏文形式は、それぞれ次の語の対応形式による: sa「土」、chu「水」、khab「針」、skad「話」、bod「チベット人」、skam「乾いた」、sman「薬」、lang「起きる」、'thung「飲む」、mar「バター」、gser「金」、dngul「銀」、skas「梯子」。

表8について、Phongpa 方言を中心に評価すれば、蔵文 u, ab, am, ul 対応形式が維西塔城下位方言群に認められる音対応と共通性が高いことがわかる。また、蔵文 ad, an 対応形式についても、主として同下位方言群の諸方言との共通性を見せるといえる。

一方、蔵文 a, ang, ung 対応形式は維西塔城下位方言群に特徴的な音対応を示していない。すなわち、蔵文 a には中舌音 (/ʌ, ɐ/) が対応し、他の2つには末鼻音の独立調音の維持 (/ɔŋ, oŋ/) が期待されるところである。ところが、これらの音対応上の性質は他の下位方言群と高い比率で一致する。加えて、蔵文 a 対応形式では、Melung 方言と共通の音対応を示し、蔵文 ang, ung 対応形式は sKobsteng 方言と共通の音対応を示している。このことから、音対応を共通の改新ととらえて理解するとき、これらを判断基準として取り扱うことが困難な事例となる。

蔵文 od, ar, er, as 対応形式については、維西塔城下位方言群だけでなく、香格里拉方言群全体に共通する特徴を示している。蔵文 ar, er 対応形式については、Phongpa 方言が雲嶺山脈東部下位方言群や建塘下位方言群に属するもの以外の諸方言に認められる対応関係を見せている。この特徴については、むしろ例外とされる下位方言群の現象が注目され、それについて詳細な記述と地理言語学的分析がある(鈴木 2019)。蔵文 od 対応形式については、音対応について規則を見出しがたい。選定した語形式 (bod「チベット人」) に特有の現象である可能性もあるが、図3の分布を見ると、Phongpa 方言と共通する形式は、地図中部に集中している¹⁴。蔵文 as 対応形式については、各方言ごとに /e/か/ɛ/で現れるが、この差が有意であるとは判断できない。

以上の特徴を踏まえ、Phongpa 方言の音対応の類型は、維西塔城下位方言群に属する諸方言の特徴をよく表しているといえる。この下位方言群の内部にも差異が認められるが、Phongpa 方言は Zhollam 方言に対応する事例(蔵文 ad, od 対応形式)、Melung 方言に対応する事例(蔵文 a 対応形式)、sKobsteng 方言に対応する事例(蔵文 ad, am, ang, ung 対応形式)など、個別に対応関係を見出すものがある。当然ながら、維西塔城下位方言群内部にも差異は多く、それぞれ報告があり(鈴木 2010, 2012, 2013a)、Phongpa 方言について見られる音対応がすべて独立した音変化によって成立した保証はないため、完全に一致する対応関係を得ることは不可能である。以上に指摘した特徴は、香格里拉方言群の中でも維西塔城下位方言群内部にのみ見られることが多く、Phongpa 方言と共通の改新を有する方言群と考えることができる。

以上のことから、Phongpa 方言は維西塔城下位方言群と系統的な関連をもつと判断することが妥当である。一方、同下位方言群内部で音対応が分かれるものについて、Phongpa 方言はいずれとも有標の共通の改新を示すことから、方言分化をさらに詳しく跡づけるのは時期尚早といえる。一方、鈴木(2020)で記述したわり音位置の /r/ の留保という特徴は、維西塔城下位方言群の諸方言とは共有せず、代わりに子音としては脱落する一方母音の音質に影響を与えるという共通の音変化の方向性が認められる。わり音 /r/ の音形が蔵文に例証されることから、Phongpa 方言は同下位方言群の他の方言よりも早い段階で分化し、古形を留保していると考え

¹⁴ この現象に対する解釈は、稿を改め議論する。なお、地理言語学で音韻体系・変化を扱うこと自体少なく、またそれらを体系性の点から扱うことはもっと少ない(鈴木 2017、黄河 2022 など参照)。このため、表4～8で検討した事柄は、すべて個別語彙でどのように見られるかを扱っている。

てよい。Phongpa 方言を除く諸方言は、分化ののち共通の方向性をもった音変化を経験したと理解する¹⁵。この Phongpa 方言の独立した発展は、その分布地点が他の維西塔城下位方言群に属する方言の分布地点から離れていることも考慮に入れられる。

母音＋末子音対応形式の類型は瞿霽堂(1990)などでも議論されているが、特異な音対応に現れる母音の質の類似が方言区分の根拠とされたことはない。本節で見た現象は、地理的に近接した地域についてその特異性を根拠に方言区分を行える事例の1つとなり、特に下位方言区分を判定する方法として参考にすることができるといえる。もちろん、この方法を適用できる方言群がチベット系諸言語のいずれに認められるかは未知数である。

4. まとめ

本稿では、蔵文母音＋末子音字の音対応形式を対象に、Phongpa 方言の特徴を明らかにし、それを周辺諸方言および香格里拉方言群の諸方言の事例と対照し、Phongpa 方言との共通の改新をもつ方言群を明らかにした。これにより、Phongpa 方言は香格里拉方言群維西塔城下位方言群に属する1方言であると考えることができ、その初頭子音の特徴から、同下位方言群の中で早い段階で分岐しかつ古態の特徴を留保している言語であると考えることが妥当であるといえる。

一方、Phongpa 方言の分布地域を見ると、維西塔城下位方言群の分布域からは地理的な連続体を構成していない。近隣に分布する変種は香格里拉方言群に属するとはいえ、維西塔城下位方言群とは異なる下位区分に属するものである。この事実から、今後 Phongpa 方言の話者がたどった歴史について考察を進める必要がある。

付記

本稿にかかる現地調査は、本研究に際しては、2017-2020 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(A)「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」(研究代表者：鈴木博之、課題番号 17H04774) および 2018-2020 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「高精細度広域地図による中国および隣接する多言語地域の地理言語学的研究」(研究代表者：遠藤光暁、課題番号 18H00670) の援助による。

参考文献

Bartee, Ellen Lynn (2007) A grammar of Dongwang Tibetan. PhD dissertation, University of California at Santa Barbara.

Denwood, Philip (1999) *Tibetan*. Amsterdam: John Benjamins. doi: <https://doi.org/10.1075/loall.3>

¹⁵ 鈴木(2013a)は、維西塔城下位方言群の諸方言においてわたり音位置の/r/が後続母音の発展に影響を与えた原因にナン語との接触を示唆している。Phongpa 方言の分布地域はナン族やリス族の分布地域と接しており、また村内で複数の民族が暮らしている(呉光範 2009: 489-490)。維西県のチベット文化圏では、これらの民族言語との継続的な言語接触が存在する背景がある(Suzuki 2017)中で、Phongpa 方言はなお古態を反映しているといえる。

- Endo, Mitsuaki, Makoto Minegishi, Satoko Shirai, Hiroyuki Suzuki, and Keita Kurabe (eds) (2021) *Linguistic atlas of Asia*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- 和繼全 (2012) 〈東巴文藏語音詞研究〉《西南民族大學學報（人文社科版）》5: 52–57. doi: <https://doi.org/10.3969/j.issn.1004-3926.2012.05.010>
- 和繼全 (2015) 《白地波灣村納西東巴文調查研究》北京：民族出版社。
- Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthang Tibetan of Yunnan: a preliminary report. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 19.2: 69–92. doi: <https://doi.org/10.15144/LTBA-19.2.69>
- 黃河 (2022) 〈用集成數據分析增加 ABA 分佈對語音現象的解釋效力〉《岩田礼教授榮休紀念論文集》編輯組編《岩田礼教授榮休紀念論文集（下冊）》53–65. 東京：日本地理言語学会. doi: <https://doi.org/10.5281/zenodo.6342364>
- 江荻 (2002) 《藏語語音史研究》北京：民族出版社。
- 格桑居冕[sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京[sKal-bzang dByangs-can] (2004) 《實用藏文文法教程 [修訂本]》成都：四川民族出版社。
- 陸紹尊 (1991) 〈藏語中甸話的語音特點〉《語言研究》2: 147–159.
- de Nebesky-Wojkowitz, René (1956) *Oracles and demons of Tibet: The cult and iconography of the Tibetan protective deities*. 's-Gravenhage: Mouton.
- 西義郎 (1986) 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11.4: 837–900+1 地図. doi: <https://doi.org/10.15021/00004359>
- 西田龍雄 (1963) 「十六世紀における西康省チベット語天全方言について---漢語・チベット語単語集いわゆる丙種本『西番館譯語』の研究---」『京都大学文学部研究紀要』7: 85–174. URI: <http://hdl.handle.net/2433/72922>
- 西田龍雄 (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108–169 東京：冬樹社。
- 瞿靄堂 (1990) 《藏語韻母研究》西寧：青海民族出版社。
- 瞿靄堂 (1996) 《藏族的語言和文字》北京：中国藏學出版社。
- 瞿靄堂、金效静 (1983) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》3: 76–84.
- 鈴木博之 (2007) 「チベット語中路[sProsnang]方言の/r/を含む子音連続」『東京大学言語学論集』26: 31–47.
- 鈴木博之 (2009) 「《西番譯語》〈川七〉18 世紀チベット語打箭爐方言の性格について」『京都大学言語学研究』28: 33–63. doi: <https://doi.org/10.14989/141799>
- 鈴木博之 (2010) 「カムチベット語維西塔城[mThachu]方言におけるそり舌化母音-その音声学的特徴の記述と分析」『京都大学言語学研究』29: 27–42. doi: <https://doi.org/10.14989/141808>
- 鈴木博之 (2011) 〈嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源〉《語言暨語言學》12.2: 477–500.
- 鈴木博之 (2013a) 〈雲南維西藏語的 r 介音語音演變—兼談“兒化”與“緊喉”之交叉關係—〉《東方語言學》13: 20–35.
- 鈴木博之 (2013b) 「カムチベット語塔城・格登[sKobsteng]方言の音声分析」『アジア・アフリカ

- の言語と言語学』8: 123–161. URI: <http://hdl.handle.net/10108/75672>
- 鈴木博之 (2015) 《東方藏區諸語言研究》成都：四川民族出版社。
- Suzuki, Hiroyuki (2016) In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10: 99–125. URI: <http://id.nii.ac.jp/1085/00002195/>
- Suzuki, Hiroyuki (2017) The vitality of Khams Tibetan varieties in Weixi County. *Asian Highlands Perspectives* 44: 256–284. URI: http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ahp/pdf/AHP_44.pdf
- 鈴木博之 (2017) 「音韻現象の ABA 分布をめぐる解釈の方法とその実際—チベット文化圏南東端のカムチベット語を例に」『言語記述論集』9: 43–64. URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00000911/>
- 鈴木博之 (2018) 「香格里拉市北部のカムチベット語諸方言の方言特徴とその形成」『アジア・アフリカ言語文化研究』95: 5–63. doi: <https://doi.org/10.15026/92458>
- Suzuki, Hiroyuki (2018) *100 linguistic maps of the Swadesh word list of Tibetic languages from Yunnan*. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. URI: https://publication.aa-ken.jp/sag_mono3_tibet_yunnan_2018.pdf
- 鈴木博之 (2019) 〈利用語言地圖闡明音變的擴散和界限：以香格里拉藏語的“r 韻尾”語音演變為例〉鈴木博之、倉部慶太、遠藤光曉編《東部亞洲地理語言學論文集》1–13. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。URI: https://publication.aa-ken.jp/sag_mono6_eastern_asian_2019.pdf
- 鈴木博之 (2020) 「カムチベット語捧八[Phongpa]方言のわたり音/t/」『ニダバ』49: 31–38. URI: <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049097>
- Suzuki, Hiroyuki (2020) Geolinguistic significance of the Phongpa dialect in the history of Yunnan Tibetan. *Proceedings of the Second Annual Meeting of the Geolinguistic Society of Japan*, 25–29. doi: <https://doi.org/10.5281/zenodo.4515013> [A revised edition published in Suzuki (2022: 141–148)]
- Suzuki, Hiroyuki (2022) *Geolinguistics in the eastern Tibetosphere: An introduction*. Tokyo: Geolinguistic Society of Japan. doi: <https://doi.org/10.5281/zenodo.5989176>
- Suzuki, Hiroyuki and Tshering mTshomo (2009) Preliminary analysis of the phonological history of Melung Tibetan. *Language and Linguistics* 10.3: 521–537.
- Tournadre, Nicolas and Hiroyuki Suzuki (2022) *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelle for the cartography). Villejuif: LACITO Publications.
- Wang, Xiaosong (1996) Prolegomenon to Rgyalthing Tibetan phonology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 19.2: 55–67. doi: <http://doi.org/10.15144/LTBA-19.2.55>
- 吳光範 (2009) 《迪慶·香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索》昆明：雲南人民出版社。
- 張濟川 (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》北京：社會科學文獻出版社。
- 朱曉農 (2010) 《語音學》北京：商務印書館。

Dialectal Classification of the Phongpa Dialect of Khams Tibetan

Hiroyuki SUZUKI
minibutasan [at] gmail.com

Keywords: Tibetic languages, Khams, Sems-kyi-nyila dialect group, dialectology,
shared innovation

Abstract

The Phongpa dialect of Khams Tibetan, spoken in Weixi County of Yunnan Province, China, possesses a striking feature that /r/ appears as a glide. Comparing this phenomenon with Written Tibetan (WrT), which reflects an ancient sound form, we find that the glide /r/ corresponds to WrT subscript *r*. This sound correspondence shows that the Phongpa dialect, to some extent, maintains an archaic feature, and it is arguable which position the Phongpa dialect occupies within the modern dialects. This article primarily discusses the sound correspondence of the WrT ‘vowel+final consonant’ form with the Phongpa dialect in comparison to that of other surrounding dialects. By doing so, the article elucidates shared innovations between Phongpa and other varieties. It concludes that the Phongpa dialect belongs to the Melung subgroup of the Sems-kyi-nyila dialect group, in which the Phongpa dialect is estimated to have undergone the earliest differentiation from other dialects.

(すずき・ひろゆき 京都大学)